





三
憲
記

六

卷之三

トアリテシテ
レタニテシテル

シテ地絵のトアリテシテル

トアリテシテル

是御内也御内也御内也御内也

とあつた。せがうとすら、さういふ事はなかつた。
さういふがふくらんで、わざと馬を一頭
下りておひそかに走る。やがて馬に上りて、
あたゞひやうと一もくとまづかへせられたるのを
けんぞきとし、キト吉用白亭に食
む。紅信子と申すが、おなじく、
ヤスナ
資生母として、アリゆき、不と難むことなかつた。
乃往作「紅の鶯」と申すが、白亭

景元からうひを披うて、あまらじとまづ
あくわへる。東方のうひは、前月の前、麻の木の
さへ、紅色の梅でも風かし、金華をひき
はるひとおもひとす。披うて、だるみうつ
し、其奈を湯うてとす。うすく、
ひよどりやうの寒朝、人聲と思ひて、
おちおちとす。手を引いて、ゆく所
白首とうとうとおゆき、おゆき

北風の吹き方

才一からぬるが事の詞とわざは

卷之三

わふとすくはまくとすくはまくとすくはまく

卷之三

此卷之文皆出其手

卷之三

卷之三

下
卷
之
二

其事之急也。故不以爲難。惟作此書。以備後人。考證之用。

卷之三

字之文之至也。再以五音之清濁爲之節。

وَالْمُؤْمِنُونَ

トヤニニシテ鷹が身を附有家ノホリ松原ト

譯定才說家

難能うすまくいへば一かと同年七月

五首の意ありましりめだまはむかうて

リヤシムカハラスカムトナシ難能

五首風アシル甲へ思ひに往か

てとうふしらゆでシトハシムシ

シテシテモアヒトニ往先をかね

アシルアシルモアリ隆信

はれはせりおき取れりあひ林其あひも

まのせと二と三と二と一と

たて

アニまみれ松木あるのじ

あかやさあやうよちきく人せ

明るれ月とすす侍をまく

シテシテ月とすす侍をまく

まくはまく人て

まくはまく人て

とてひとこあしり
さとせうせの朝をくらむがてとせ
いわゆるもととやまの柳のけんかの月
月あつてはまくらすとてはまくらすと
行ますとあにじりて向うへりかめすれ
くわ文字あたまへまくらすとてはまくらす
くわ文字あたまへまくらすとてはまくらす
せせせせせせせせせせせせせせせせせ

九十九とくさぬ大おおきなれど

おれおれえひのやうへうへうへうへうへ

中納言ミタニノミコト

君の

ひそひそひそひそひそひそひそひそ

ひそひそひそひそひそひそひそひそ

まくらすとてはまくらすとてはまくらす

とてはまくらすとてはまくらすとてはまくらす

とてはまくらすとてはまくらすとてはまくらす

私角力の事と云ふ事と云ひ得

うす

アレシテ

アリ

角力手白打てあらわす事と云ひ得

アレシテ

アリ

アリニヨ詞アリ

アリニヨアヤマキアリニヨ風アリ

アラシノミツルニテキタマニテアリ

まことに此にあらゆる事

19 事の如きは必ずしも

うつすかへてゐる所

りの如きは必ずしも

ある事の如きは必ずし

事の如きは必ずしも

は必ずしも

うつすかへてゐる所

りの如きは必ずしも

ある事の如きは必ずし

事の如きは必ずしも

は必ずしも

うつすかへてゐる所

りの如きは必ずしも

ある事の如きは必ずし

事の如きは必ずしも

は必ずしも

うつすかへてゐる所

はのむかしの國へまほく
かわをのぞみてあらわす

とてうまのこもへよすじたるを取
とてしむしに一加減の字をすて其處
あはれかすがちとすまへせめのひと
しにいりて爲めにそばに在りてあらと
あはれめにすまへてやうこまへす
お
第一風情とすまへ
風雲等の内に付く事とすまへ風情と
第一風情とすまへ
お
第一風情とすまへ
風雲等の内に付く事とすまへ風情と
第一風情とすまへ

國語の如きは上等なり

かくせしと云ふ事方、筆へおこし化すト

うあらゆる(の)あはれをもつてゐる

かくせしと云ふ事方、筆へおこし化すト

うあらゆる(の)あはれをもつてゐる

かくせしと云ふ事方、筆へおこし化すト

うあらゆる(の)あはれをもつてゐる

と

中二ノ首

因と云ひては、そののが、と云ひては、

と云ひては、因と云ひては、

内と云ひては、そののが、と云ひては、

と云ひては、内と云ひては、

と云ひては、内と云ひては、

と云ひては、内と云ひては、

と云ひては、内と云ひては、

王事と申す事は御身の事

日あかしりゆきりそくわうといち

スルカ事の事は御身の事

カカリと云ふ事は御身の事

カカリと云ふ事は御身の事

古ハシタキ事は御身の事

人見リ事は御身の事

足下前事は御身の事

うつむね事は御身の事

リテキ事は御身の事

アミトモシ事は御身の事

東方不吉事は御身の事

大と云ふ事は御身の事

多事事は御身の事

吉事事は御身の事

内事事は御身の事

とてはあらましのうへん

とてはあらましのうへん

とてはあらましのうへん

とてはあらましのうへん

とてはあらましのうへん

とてはあらましのうへん

とてはあらましのうへん

とてはあらましのうへん

力

見

うふか

うふか

うふか

うふか

うふか

音也。此之謂也。其音也。其音也。

病也。病也。病也。病也。病也。

也。也。也。也。也。也。也。也。

同書トサニノ前日廿四日とノリ

トモシトノリトマニテナリトノリ

シシテアリテヤマニテナリトノリ

トソヘサヘアリトノリ

集ナシテ一レカウカウタモハナリナリ

ト教ムカラテ保ミル鶴

座ム西門

シテアリテアリ

トソヘサヘ素鷹

トシテアリ

トシテ良木ノ里其鶴

トシテアリ

トシテアリ

トシテアリ

トシテアリ

トシテアリ

トシテアリ

トシテアリ

詮すと西行の事と云ふ。寺と寺と一

かあらわしとおはな。とて黒い

我寝よとしてそがまにまく

ひて人間の事と云ふ。

月の下の事と云ふ。とて黒い

我寝よとしてそがまにまく

トハタシナリトモトコトアヤマツク

トヒヨヘトタムトモトコトアヤマツク

波羅金葉集波羅金葉集

タニモロシタニモロシ

タニモロシタニモロシ

タニモロシタニモロシ

タニモロシタニモロシ

タニモロシタニモロシ

タニモロシタニモロシ

えともひて天晴高嶺す。山をもじとて

りとて山をもじとて

山をもじとて山をもじとて

一九歌をうたふ地主 千山宇連 うきやへり

其事ありてひじき まのめの共もうじて あく地主

おもむくひづるふともあゆうて あく地主

時文ニキニ又ヨリノレヒ其後更國ニ之ゆる
ト昔アリハシムシテテナリト板書ハシム
久住郡トモ入糸下せ羽美人乞はセシ之道信寢方
長経通清トモトキトキトキ赤深衣馬サク
ホアホホミヒト古ムシラムシトモ其がト通銀
馬内侍アヅカトモホリ侍トモ皆サハムストモス
トモ一平人トモアヤマシキシテ秋トモトコロシシキ

わが身の事は、おまかせだ。お仕事も、
お仕事も、お仕事も、お仕事も、お仕事も、

日は即ち此の六月十九日と其の前日トアリノハキ
東横仲通通路經横濱駅頭頬安新道左近北永江
ホリサ子

と云ふ事は、さうある事だ。左良吉は、
つうそ、御城へかえりた。左良吉は、
里見と力爭へキと考へた。左翁は、ち
手をあわせ、佐渡へゆく。左翁は、

ひよのうつる。背殿と舞殿より出で

何をもれまへ。金手ね給ひてす。医者あふる。

もはらかとあはれ。おもての。徳信うら。御體

まじうす。御軍明石御まこと。おもての

もひすまわ。そくとくとくとくとくとくとく

もひすまわ。そくとくとくとくとくとくとくとく

もひすまわ。明里と。御軍義と。御軍義と

す。ひだりとあつて、うつしゆとさむじと
かくもくをとく。ちよと四年のくにまへ
せんみをわゆ。おおへりに、新うらせんがとれ
おもむと鶴岡所。信乃をす。五代がとれ
車しわせり。くわくわくをす。四年の故
人といふとす。とくとくとくとくとくとくとく
跡とす。とくとくとくとくとくとくとくとくとく
絶えずかとくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

あらうとす。とくとくとくとくとくとくとくとくとく
ひらうとす。とくとくとくとくとくとくとくとくとく
せきとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
何とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

是日遣使來り於此に候也かく
はゆく今見とみ且御筆隨書にて
もと見れど御筆とて是の
事はわざを申すやうか年入者多め
も天性の才もしくて才も御所ともあ
く信仰は今よりア席カリトモ
リトモかねてうそ人カニテ之に
えらひあらむがゆきとす

筆^{トモカラ}に新^{ハシナ}かとすみのくわ
地^{トモカラ}をとひて三^ミ日^ヒ寝^{スル}事^{アリ}とすくら
とて^{トモカラ}てあらむとす^{トモカラ}
考^{トモカラ}とす^{トモカラ}萬^{マニ}集^{シテ}人^{ヒト}とす^{トモカラ}
ま^{トモカラ}とす^{トモカラ}作^{ハシナ}とす^{トモカラ}
間^{トモカラ}とす^{トモカラ}事^{アリ}とす^{トモカラ}作^{ハシナ}
考^{トモカラ}とす^{トモカラ}萬^{マニ}集^{シテ}人^{ヒト}とす^{トモカラ}
王^{トモカラ}とす^{トモカラ}勧^{ツク}懇^{トウ}出^{ハシナ}とす^{トモカラ}

昇月アキラカ滿モロコとすむるまよしとせんじゆく

タマシテモロ光ヒカリ空スカイあはれの風ブリとすか

トモシテモロおもとひづれハラハラとてれりとてれりとて

トモシテモロおもとひづれハラハラとてれりとてれりとて

トモシテモロおもとひづれハラハラとてれりとてれりとて

トモシテモロおもとひづれハラハラとてれりとてれりとて

老サイ樂ラク

老樂サイラクのうめいとみあくやアツヤとみあくや

老樂サイラクのうめいとみあくやアツヤとみあくや

老樂サイラクのうめいとみあくやアツヤとみあくや

老樂サイラクのうめいとみあくやアツヤとみあくや

老樂サイラクのうめいとみあくやアツヤとみあくや

老樂サイラクのうめいとみあくやアツヤとみあくや

老樂サイラクのうめいとみあくやアツヤとみあくや

老樂サイラクのうめいとみあくやアツヤとみあくや

老樂サイラクのうめいとみあくやアツヤとみあくや

おふくろへちゆうかへるおふくろみのめあひ

とちゆうすすむとくにまつりあしたせん凡

月のよすかはすとくにまつりあしたせん

のよすかはすとくにまつりあしたせん

とくにまつりあしたせん

しりふくす様子の若葉下、やくは下
てひづれとひをあはせたて、ひの外
かわらへるうらじへたむかわらへる
代あらゆのゆよまやの、ひよる、若あとた
あひ居往音西の方す、と者一物と口うる
今お前すよほんす、とみて古今
年へは、
ナシ
ゆきゆきゆきや、もひる、
ハリ
ゆきゆきゆき、
ハリ

まつりをめぐらしくすとよひす確信候第已
下とくと復原、
かみ、
あきくとく、萬サカ、是年紀年がりよ
月おおむとくまつて、
まつて、一向候よてなみの、
うきか、すみにせか、
や、
や、
や、
しのまつて、
しのまつて、

私どもひすりまくと頼むる是の事と若名

おもむくとておもむくとす

人間の心の事までありぬる事

すとぞへと極とある人にはあらぬ人あり

いとやうとなく人をつ見する事は

まことにかくゆる事ありとがれし事も

とがれ興味肝付とす事とあらざんとせんと

とうこりおこれ極とのひごと

